

シェパード劇の失語症
A Life of the Mind を中心に
“Aphasia in Shepard’s Plays”

古山 みゆき*
Miyuki Koyama

1 序

(1) 失語症の登場人物

Sam Shepards は *Inacoma* (1977) という未刊の作品中で、記憶喪失の主人公の昏睡状態を歌と詩で描いたが、ここに失語症はみられない。しかし、1980年代以降のかれの作品には、この病を患っている登場人物が現れてくる。彼らは、映画 *Paris, Texas* (1984) の Travis、劇作 *A Life of the Mind* (1985) の Jake と彼の妻 Beth、そして *States of Shock* (1991) 退役軍人 Stubbs などである。このような人物の出現の理由の一つは、1979年に、シェパードの妻の母、Scarlett Johnson Dark が脳溢血で失語症になったこと、1984年に、彼と親しい演出家、Joseph Chaikin も心臓手術で失語症になったという個人的体験であろう。

シェパードの先に述べた劇中人物達は、何かの暴力的な事件の衝撃で部分的な記憶喪失、半昏睡状態、そして失語症になってしまう。つまり、ある種の狂気になる。

失語症は、発音器官、聴覚に障害がないのに言語を使用したり、理解できなくなる病状で、大脳皮質の一定部位の障害でおこる。主に感覚性失語症と運動性失語症がある。¹⁾

書かれたり言われたりする事が解らない前者

には、トラヴィス、ジェイク、ベス、スタッフスのすべての人物がかかっていると思われる。しかし、ベス以外の人物の言葉は、他の登場人物との対話にならなくても、単語や文章になっていて syntax があるが、彼女のそれは、初めは無意味な音を発するだけである。彼女は、言おうと思う事が解っていて言葉にそれを表せない運動性失語症にもかかっている。より強度の失語症の彼女は新たに自らの言葉を創りださなくてはならない。トラヴィスらと同じく、劇の終末では、彼女の体力や過去の記憶は完全ではないが徐々に回復する。だが、彼女だけが新しい言語で世界を再創造しようとする。

(2) シェパードの言葉

シェパードは作品の言葉について次のように言及している。

Language becomes physical “incantation” and words are used not in the utilitarian sense of rational communication but to produce a physical and emotional shock capable of making leaps into the unknown.²⁾

彼は劇の言葉を心の中の絵、無意識の出来事

* 英語専攻

を示す呪文のような記号だと言う。この考えは、彼の尊敬する英国の演出家 Peter Brook の、以下のような、言語が作品全体の意味となる、舞台上の有機的記号だとする姿勢に近い。

-- a language of actions, a language of sound -- a language of word - as - part - of movement, of word as life, of of word as parody, of word as rubbish, of word - as - contradictions, of word - shock or word cry.³⁾

ブルックと同じく、シェパードも言葉自体が作品の意味内容、世界観を表現すると考えているとすれば、登場人物が言葉をなくした状態の失語症とその回復は、言語の喪失と再創造の考察の一つとなり、それが、作者の言語観及び世界観探究の端緒になることを期待したい。以下本論では、運動性失語症と感覚性失語症の両者を患ったベスや、失語症の他の登場人物の言葉の再生過程とその問題点にふれ、作家の呈示する、言葉についての、世界についての reality を再考したい。

2. 本論

シェパードが「愛についての伝説」呼んだ家庭劇『心の嘘』は、1985年のベスト・プレイに選ばれている。しかし、冗長な事件の展開や劇作術の凡庸さのためと、家族や男女の愛の虚と実という作品の message は、彼の他の家庭劇ではすでに示されていたものだから、作品自体の評価は高いと言えない。劇評家 David J. Derose は、既に有名になってしまったシェパードは、観客に迎合し劇作術における挑戦を犠牲にしていると言う。⁴⁾

だが、最新作『衝撃状態』は、父と息子の葛藤を表す家庭劇で、戦争という暴力で不治の狂気となった失語症の息子スタップスの父親殺しで幕が下りる。前作『心の嘘』では、ベスが、スタップスのように暴力による被害者であり、

ジェイクが父親殺しを行っている。『心の嘘』と最新作の連続性は、『心の嘘』の再考が、80年代半ばから現在までの作家の世界観を知るうえで無意味でない事の証となりうし、特に劇の言語が表現しているリアリティを探るには、ベスの言葉がスタップスのものより有効にみえる。

(1) 暴力

先に述べたように、シェパードの作品の登場人物の失語症は、何等かの暴力によっておこされている。暴力は、人間社会の言葉による communication の喪失で、自分からも疎外された絶望の状況を hyper-realistic に表したものだ。自己や人生の疎外について作者は、1988年にインタビューで以下のように言っている。

What's most frightening to me right now is this estrangement from life. People and things are becoming more and more removed from the actual. We are becoming more and more removed from the Earth to the point that just don't know themselves or each other or anything. We're this incredible global race of stranger ... People live together for a while ... they split, and they never see each other again. Then they get together with somebody else ... split.⁵⁾

このような全体統一的なもの、永遠不変なもののない断片化していく世界の中で、永遠なもの、例えば男女の不変の愛や不変の人格への幻想が暴力をうんでいく。

(2) 死に向かう失語症

『心の嘘』のジェイクの起こした暴力は殺人未遂である。妻ベスの performer としての人格を理解できず女優の役と妻のそれが重なり、芝居の話の恋愛を現実の浮気と誤解する。激しい気性の彼は、嫉妬の末、彼女の頭を殴り彼女

の死を確かめず逃亡する。殺人という行為に混乱した彼は、感覚性の軽い失語症になり、弟の Frankie とうまく会話ができず事件の説明ももどかしい。妻と妹の見分けもつかず、父殺害の記憶も失う。劇の進行と共に、過去の記憶は回復し、妻と父の殺害を悔いるが、肉体的に衰弱し口もほとんどきけなくなる。そしてベスへの愛を確認し彼女に会いに、彼女の実家に行くと、兄 Mike に弟同様鹿と間違えられ足を撃たれる。

彼は、本当は無い物を在ると信じて裏切られ、妻に「嘘」をつかれたと思い絶望して暴力を振るい言葉もなくす。無い物とは、作者が *Angel City* (1976) の序文中で述べた、その行動の動機が全て合理的に説明のつく統一的全体的人格である。(6)在る物は、*Motel Chronicles* (1982) の、作者の次の詩にあるようなパフォーマーとしての人格であろう。

people here
have become
the people
they're pretending to be⁷⁾

永遠で絶対的なものは無いというリアリティに裏切られたジェイクの失語症は、劇の進行と共に悪化する。彼は、言葉を捨て、社会から逃避する。*Buried Child* (1978) の Tilden は、子供を殺された後、言葉を失ってニュー・メキシコの砂漠を放浪し、言葉こそ人間の生き延びる手段だと解ったという。⁸⁾ 言語は社会とのコミュニケーションの重要な手段で、その獲得は、生きる事を意味する。ジェイクは、ベスとフランキの結婚を祝福してベスの実家を去る。しかし、作品では、彼の内面世界は十分に表現されず、父の遺骨を抱え、言葉を捨てた彼の運命が、死であることだけが強調されている。社会的な意味で、言葉の完全な否定、永遠の沈黙は死なのか。

(3) 過去に向かう失語症

では、失語症から回復し言葉を得た人物達は如何なる生を得たのか。ジェイクのように、比較的軽い感覚性失語症だけにかかるが、容易に言葉を回復しそれを使うのは、『パリ、テキサス』のトラヴィスと『衝撃状態』のスタッブスだ。彼等は過去の記憶を取り返し、その過去の中に真実の自分を再確認し未来を考えようとする。トラヴィスは、過去の妻への所有欲で、それが家庭を破壊したと気づき、再びやり直そうとする。スタッブスは、過去の偉大な父という幻想を知り、真実の父と対決する。トラヴィスもスタッブスも、自らの過去の真実と関わり、ジェイクのように過去も言葉も捨て死に突き進んでは行かない。しかし、ベスのように、音のような言語創造の初期段階から自らの新しい言葉を作ろうとしていない。彼等は、既に在った、過去に使っていた言葉を取り戻しそれで他人へのコミュニケーションを図ろうとするが失敗する。彼等の言葉は彼等の再生を完全には約束しない。

男女間の真実の愛について作者は、'terrible and impossible' というが、⁹⁾ トラヴィスは、妻ジェーンとの愛を信じるあまり、彼女をトレーラーから逃げないように足首にベルをつけて閉じこめる。彼女は彼の嫉妬に耐えきれず、トレーラーに放火し逃げ出す。彼も、弟夫婦の所に幼い子供を置き去りにし、4年間記憶喪失と失語症にかかり砂漠を放浪する。トラヴィスの、無いはずの物を、つまり変わらぬ愛を在る物と思いそれを失う不安感が、妻に暴力をふるわせる。そして、妻の裏切りに衝撃を受け言葉を失う。

彼は、弟と息子との再会により記憶も言語も徐々に取り返し、息子に対して父の、妻には夫の役割を演じようとし、家族再会の夢、自らの再生を果たそうとする。だが、彼の得た言葉では親子三人が会う未来は来ない。お互いの姿の見えないセックス・クラブの小部屋で、彼と妻は、鏡を介してしか話さず自然な会話はない。妻と子を再会させ、再びひとりで放浪の旅にでる彼に、家族の分裂、満たされない人生の繰り返しを見るのは容易だ。生を意味するはずの彼

の言語は妻とのコミュニケーションには役立たず、彼の疎外を克服できない。

1983年10月、作者はチェイキンへの手紙で、突然の危機的な状況で identity を奪われた現代人の喪失感に関心が在るといっている。

this whole question of being lost -- an idea of one's identity being shattered under severe personal circumstances -- in a state of crisis where everything that I've previously identified with in myself suddenly falls away. A shock state ...¹⁰⁾

『衝撃状態』のスタッブスにとっては、上のような危機状態は、戦争という暴力である。劇の初めでは、偉大な軍人である大佐の父と、負傷した息子の戦友スタッブスが、戦死した息子の命日にファミリー・レストランでお茶を飲んでいるように見える。スタッブスは入院中だが許可を得て外出している。彼は、湾岸戦争と思われる戦争で負傷し、車椅子に乗った「肉の塊」になり、記憶を失い、会話の困難な失語症にかかっている。ウェイトレスや、近くにいる白人中年夫婦に向かって笛を吹いたり、シャツを上げて胸の傷を見せたり、叫び声で一方的に自分の言いたい事だけを話しかけたりする。大佐の命令にうなずき乾杯をするが会話は無い。

劇が進み、彼等が人形を使って戦場を再現しているうちに、スタッブスの記憶が次第に回復し大佐と会話を交わす。彼は、彼こそが大佐の息子で、恐怖で敵前逃亡している最中に味方に撃たれたことを話そうとする。冷酷な父はあくまで息子の言葉を否定し彼をむち打つ。作品は、父に疎外され絶望した彼が、父の首を剣で断ち切ろうとする暴力で終わる。

正義の戦い、偉大で強い国や父といったアメリカの神話が、在る意味で無い物がこの戦争に託されている。しかし、破壊というこの戦争の実像に肉体も精神も不能にされたスタッブスは、言葉を取り返してもそれによる意志疎通は出来ず、彼も意志疎通に暴力をもちいる。言葉でな

く、父殺しという暴力でしか彼の再生はないのだろうか。作者は、現代の暴力や破壊に、既存の言葉の限界を見ているようだ。

(4) 未来への失語症

既述のように、『心の嘘』のベスは、事件直後ひどい精神錯乱になり、感覚性及び運動性の両方の失語症にかかる。他の登場人物のそれより重症で、言葉の無い乳幼児のようになっている。ベスは、当初運動性失語症にかかり、兄に話そうとするが言葉が出ず、息使いが荒くなり短い音しか出せない。感覚性失語症だけになり言葉をようやく出せても、簡単だが論理的なつながりのない文で語の発音も不正確だ。以下のようなベスが自分の加害者の名を思い出せず ‘a love’ という台詞は本能的でしかも連想的なものになっている。

Who fell me? ... Iza name to come. Itz -- Itz -- Inza man. Inza -- name. Aall -- aall -- all -- a love. A love.¹¹⁾

彼女は、退院の頃には、声は小さいが会話できるようになるが、精神不安定状態で、怒鳴ったり叫んだりする。二幕でモンタナの実家の静養で健康を回復した彼女は、語の発音も正しくなり、独白をするほど饒舌にはならないが会話に不自由しなくなる。しかし過去の記憶はほとんどないが、ジェイクの名は言えるようになる。ベスが兄に砕け散って消えた彼女の過去を次のように語る。

If something breaks -- broken. If something broken -- parts still -- stay. Parts still float. For a while. Then gone. Maybe never come -- back. Together. Maybe never.¹²⁾

断片となったベスの過去は、ジェイクへの愛の記憶、フランキの記憶として、当座は残っていても、フランキへの新たな愛で完全に消えてしまう。この台詞は直感的だが詩的でさえ

ある。劇評家 C.W.E.Bigsby は、失語症の人物の台詞は詩的な ‘aria’ になるとさえ言う。¹³⁾ ベスはここで新しい言葉を創ったのである。

この新しい言葉で彼女は確かな未来を手にしたのだろうか。過去の無いベスだから、健康が回復するだけでなく、彼女の風貌の過去からの変身は著しい。彼女は未来に自分を築こうとする。事件直後、一幕で、彼女は青い入院服を着せられ、頭には包帯をして、目にあざがあり、歩行もできない。二幕で元気になった彼女は、包帯もあざもなく、父のシャツを着てジーンズを履き裸足である。ジェイクの幻想にあるように、女優であった彼女は、以前はドレスを着てヒールの靴を履いていた。以下のように話す彼女は、母の勧める女性用スリッパも男性用長靴もはかず、過去の gedner の枠を否定し生まれ変わろうとしている。

Just fell like the man. Shirt brings me a man. I am a shirt man … Like father … Like brother.¹⁴⁾

ベスは親の世代の男女観を否定し、結婚相手のフランキィに優しい ‘a woman - man’ になる事を期待する、そして両性具有的人間に未来をみているようだ。三幕には、彼女は血色も良くなり、1950年代の派手な若者の衣装をつけ厚化粧の姿となり、青春時代に戻る。このようなベスの未来に向かう変身は、父の飛行服を着て首に星条旗を着け父に変身し死に向かうジェイクのそれとは対称的だ。

彼女が過去を自ら捨て、未来を賭けたフランキィとの結婚はどんなものか。兄が夫ジェイクが彼女に謝罪に来たと告げると、彼女は、夫は死んだとあって会おうとしない。劇の最終場面で、夫が彼女に愛を告白すると、彼女は夫との初めての出会いの時を思い出すだけで、彼女の心にはフランキィとの結婚という未来しかない。トラヴィスやスタップスのように過去にアイデンティティは求めない。

では、彼女の結婚は彼女の新しい言葉でフランキィに意志疎通できたうえでのものか。道徳的で優しいフランキィは、兄の為に、ベスの様子を見に行き、足を負傷し豪雪で家に帰れず、足の看護に当たった彼女に愛され求婚される。兄の妻との結婚を躊躇するが、兄夫婦の別れにより彼女を受け入れる。フランキィは彼女の求愛に終始受け身で、彼からの愛の告白は無く、兄の贈り物として彼女を受け取るだけだ。彼に彼女の愛の言葉が理解されたかどうかは、大変に疑わしい。フランキィの愛が不確かなまま、彼女はあまりにも安易に、結婚に未来をかけていないだろうか。彼女の言葉で創った未来は、確かでない。

沈黙を選び死に向かったジェイク、過去の言葉で過去の自分に捕らえられたトラヴィスやスタップス、新しい言葉で不確かな未来に向かうベス、失語症の誰もが自分で選び取った言葉で、自らの疎外を救えない。観客は、失語症の登場人物を観ることで、言葉とその限界性を意識してしまうだろう。

沈黙、既存の言語そして新しい言語、どの言葉でもこの世界は言い表せない、作者は言っているようだ。失語症により言葉の限界性が強調されているが、そのことが表す世界のリアリティは何だろう。

4. 結 論

『心の嘘』でベスは、フランキィの一瞬に変わってしまう人生について、以下のように言う。

Your whole life can turn around. Upside down. In a flash. Sudden. Don't worry … This whole world can disappear. Everything you know can go …¹⁵⁾

これは、突如として、何物かに破壊され過去と不連続になり断片化した人生を表している。そして突然の暴力で断片化した言葉の状態、失

語症の状態でもある。80年代以前は、人間の下意識を作品のメッセージとしていたらしい作者は、80年代になると、世界の断片化への恐怖をメッセージとするようになったとビッグスビーは指摘している¹⁶⁾。

この世界の断片化や崩壊感は、80年代の失語症の登場人物の出現と深い関わりがあるようだ。

The War in Heaven (1985) というチェイキンとの共同制作のラジオ劇は、ある天使の詩的独白で、天使は、次の引用のように、常に起こる人生の不条理な急変でアイデンティティを失い来世をさまよいつける。

There was a time
when I felt I had a destination
I was moving
toward something
I thought I understood ...

Then we were invaded
all the domains were shattered
connections
were broken
we were sent
in a thousand directions¹⁷⁾

神、愛、孤独などが、一時的には天使にアイデンティティを与えることはできるが、彼の自己からの、世界からの疎外感は永遠に続く。次のような言葉で始まったこの作品は、同じ refrain で終わる。

I died
the day I was born
and became an Angel
on that day

since then
there are no days
there is no time
I am here

by mistake¹⁸⁾

この天使と同様に、不安定な世界の突然の崩壊で自己を、言葉を破壊されているのが失語症の人物ではないだろうか。世界が、人間が常に断片化に脅かされているから、失語症の人々のどんな言葉も、それを描ききれないのだろうか。沈黙も、既存の言葉も新しい言葉も限界がある。だが、壊される度に、人間は何か、言葉やアイデンティティを創ろうとするが、完全なものは創り得ない。これが作者の描く世界のリアリティととれないだろうか、これは、デローズのシェパードの作品への言及にある“reality unfixed”とも重なるだろう。¹⁹⁾ 世界の不連続性を強調する意味では、シェパードは postmodern の作家かもしれない。

(終)

注

- 1) 新村 出 編. 『広辞苑』第三版. 岩波書店, 1983,p.1071.
- 2) David J.Derose. *Shepard*. New York: Twayne Publishers, 1992,p.25.
- 3) C.W.E.Bigsby. *Modern American Drama, 1945 - - 1990*. Cambridge: Cambridge University Press, 1992,p.162 - - 163.
- 4) David J.Derose. *Sam Shepard*,p.132.
- 5) C.W.E.Bigsby. *Modern American Drama, 1945 - - 1990* ,p.170.
- 6) I bid.,p.171.
- 7) I bid.,p.165.
- 8) I bid.,p.183.
- 9) I bid.,p.166.
- 10) Barry Daniels, ed. *Joseph Chaikin & Sam Shepard: Letters and Texts, 1972 - - 1984*. New York: Nal Books, 1989,p.128.
- 11) SamShepard. *A Lie of the Mind*. New York: Plume Book, 1986,p.6. Also contains *The War in Heaven*, p.137 - - 55.
- 12) Sam Shepard. *A Lie of the Mind*, p.47.
- 13) C.W.E.Bigsby. *Modern American Drama*,

p.166.

- 14) Sam Shepard. *A lie of the Mind*, p.75.
- 15) I bid.,p.81.
- 16) C.W.E.Bigsby. *Modern American Drama*,
p.167.
- 17) Sam Shepard. *The War in Heaven*, p.139.
- 18) I bid.,p.137.
- 19) David J. Derose. *Sam Shepard*,p.138.